

いて記すことで「医療」そのものの構造を描き出す。終章では、医療そのものの外延があいまいなものであることを示し、医療のとらえ方についての問いかけで閉じられる。

「医療」の概念と実態をより立体的にとらえるために本書の不足を補うとすれば、異なるデータを用い異なるデザインによって現状を評価し直すか、概念をより広くとり今回考慮されていない面を含めて検討をし直すかのいずれかであろう。

例えば第4章のコスト面の現状把握について、聞き取り調査等を踏まえてはいるが、実態と実態に合致するかには疑問が残る。別の根拠に基づくデータによって見直しを行い、比較対照する必要があるかも知れない。

第6章の構造的な健康の概念に対しては、歴史により長期にわたる背景を考慮するのはどうだろうか。このとき、「西洋医学」と一括りにされるも

のとその外延のもつ、伝統的・文化的な部分に対しても、分析と考察を加え、同様に検討されるべきものであろう。その過程は、「医療に対する常識の相対化」を試みるにあたり、さらに高次の視点を見出すヒントを内蔵しているかも知れないからである。

この「最高の叩き台」を用いて、より妥当で正確な現状把握につとめ、本書が提示した疑問を問い直し、本書のとらえきれなかった面について分析・説明を試み、伝統医学や医療そのものの進むべき道を模索するという課題が、これからの研究者に向かって投げかけられているとってよい。

(浦山 きか)

[明石書店, 〒101-0021 東京都千代田区外神田
6-9-5, TEL. 03 (5818) 1171, 2018年6月, A5判,
276頁, 3,000円+税]

書籍紹介

大森弘喜 著

『フランス公衆衛生史——19世紀パリの疫病と住環境——』

初刊からやや日時を経たが、大森弘喜 著『フランス公衆衛生史——19世紀パリの疫病と住環境——』を紹介しておきたい。

日本の結核史を学んでゆくと、欧米先進国の結核の歴史的变化と、それぞれの国の社会、文化、医療が結核の歴史的变化に大きくかかわっていることを必ず感ずる。

紹介者は日本の結核史を調べながら、欧州の医学先進国であったフランスの結核の死亡率が他のヨーロッパ諸国に比べて、なぜ遅くまで高かったのかについて、いつも疑問を持っていた。

大森弘喜氏は本書の序「問題の所在と分析視角」において『結核は19世紀前半にすでにその流行が認められるものの、医学も公衆衛生学も全く拱手傍観していた。……フランスは19世紀前半、臨床医学で世界の先頭を走っていたが、病因

探求ではドイツに後塵を拝した。……ドイツでそれなりの成果を生んだサナトリウム方式を認めようとしなかった。……このようなフランス医学界の頑迷保守的な態度が、フランスの結核死亡率をヨーロッパでは例外的に高い水準に維持するに与って力があつたのである。……』と書き出している。次いで以下の章立てでパリの住環境から見たフランス公衆衛生史を述べている。

- 第1章 一九世紀パリの「不衛生住宅」問題
- 第2章 一八三二年パリ・コレラと「不衛生住宅」
- 第3章 一九世紀中葉における肺癆の流行
- 第4章 肺癆をめぐる病因学説
- 第5章 「国民病」としての結核—第三共和政前期のパリにおける結核蔓延
- 第6章 結核の予防と治療

- 第7章 パリの給水事業と衛生
 第8章 パリ下水道事業と衛生
 第9章 不衛生住宅の衛生化法
 第10章 住宅改革の思想と運動—低廉住宅の誕生

そして「総括と展望」として『近代化と国民国家の形成とが、公衆衛生の制度化を梃子にすすめられた明治期の日本とは違って、フランスでは近代市民社会の行政機構の一部として公衆衛生が制度化された。しかし、フランスの常として、衛生行政はかたちはあるが、内実を伴わなかつ

た。……』と書いている。日本の公衆衛生史、結核史、行政史と引き合わせながら読むことも有用であるが、社会インフラとしての都市計画や環境衛生の問題・建築史・社会史を骨子として結核を論じた大冊であり、日本の結核史などにおいてはあまり触れられていない視点が多く述べられている。一読を勧めたい一書である。

(渡部 幹夫)

〔学術出版会 学術叢書, 〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2, TEL. 03 (3947) 9153, 2014年5月, A5判, 616頁, 9,200円+税〕

Florence Nightingale 著

“Notes on Nursing” (初版〈復刻版〉)

1860年に出版された F. Nightingale, *Notes on Nursing: What it is, and what it is not* (フローレンス・ナイティンゲール『看護覚え書：何が看護であり、何が看護でないか』)の初版本(原本所蔵者：丸山マサ美・木村専太郎両氏)の復刻である。日本でも何種類もの翻訳・抄訳や解説が出版されている不朽の古典だが、原典にあたることで得られることもいろいろあるに違いない。裏表紙などに掲載されていたと思われる当時の版元の広告まで含めて、原本がほぼそのままのかたちでリプリントされているため、史料として手元に備え

ておくのにも適している。本書をめくってみると、看護のあり方や看護の歴史はもとより、英国ヴィクトリア時代中期における医療現場の状況、保健上の諸問題、公衆衛生思想、ジェンダー認識などを考究する際にも、本書が重要な手掛かりに満ちていることを改めて認識させられる。

(永島 剛)

〔丸善出版, 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17, TEL. 03 (3512) 3256, 2017年4月, A5判, 288頁, 定価2,100円+税〕

日本大学医学部同窓会 編, 宮川美知子 著

『醫の肖像—日本大学医学部コレクション—』

日本大学医学部同窓会編として出版された『醫の肖像—日本大学医学部コレクション—』を紹介する。本書は日本大学医学部同窓会の新聞担当理事を務める宮川美知子氏が、年10回発行される日大医学同窓新聞に「知っていますか? 医学部資料室」というシリーズ(平成11年3月号開始)を掲載、それを基に一書に纏めたものである。『日本大学医学部図書館古医学資料目録』から毎号史料一点を選び、平成29年3月号で179

回の連載となったとのことである。本書はそのうちの興味深い76編について写真や文章を調整して編集したものである。日本大学医学部創設以来の多方面からの寄贈資料の目録化は昭和56年から小川鼎三、酒井シヅ両教授により行われ現在の目録が残るわけであるが、内山孝一旧蔵古医書及び富士川游文庫がその主体となっているという。加えてシカゴ大学・ハワイ大学・中山医科大学の病理学教授を歴任したOlaf K. Skinsnes博士から